〔書　評〕

『日本語史の諸相　工藤力男論考選』

蜂矢真郷

一

『日本語史の諸相　工藤力男論考選』(以下、本書と呼ぶ)は、工藤氏の執筆された論文のうち十五篇を選んで一冊の書としたものである。本書所収の論文は、次の通りである。便宜上、①～⑮の番号を付す。また、③④⑦⑫⑮の副題は、「あとがき」にあるように目次では省略されている。

①複訓仮名
②上代形容詞語幹の用法について
③古代複合形容詞の一問題――清明の旧訓をめぐって――
④古代形容詞の形成に関する一つの問題――スミノエとスミヨシをめぐって――
⑤上代における格助詞ニの潜在と省略
⑥格助詞と動詞との相関についての通時的考察
⑦言語資料としての和名抄郷名――音訓交用表記の検討――
⑧中世形容詞の終焉
⑨形状言による副詞句の形成
⑩古代文献における固有名詞の語形の変容
⑪旅という言葉
⑫古代日本語における畳語の変遷――イトドからイトイトへ――
⑬形状動詞の諸相
⑭動詞と形状言との対応
⑮象徴詞と接頭辞――ぬなともゆらに考――

①～⑮の順序は、各々の「補記」で確認できるように発表順である。発表順は決して理由のないことではないが、④⑧、⑤⑥、⑦⑩、⑨⑫⑮は明らかに共通性・連続性を持つ(①②③も恐らくは〝初期三部作〟的なそれを持つ)ものであり、⑤⑥(および①②③)は続けて収められているのでよいとして、④⑧、⑦⑩、⑨⑫⑮が離れて収められているのは何とも落ち着かない。

落ち着かないと言えば、⑬だけが現代語を中心とする研究であることもそうである。無論、⑬は、⑭との連続性から本書に収めたとすぐに理解できるが、全体的に見るとやはり異質である。

さて、本書の評者として私が選ばれた（そのことについては第五節に後述したい）が、これらの論文と私との縁は、極めて濃いものからかなり薄いものまである。最も濃いものは⑨⑫⑮および⑭で、とりわけ⑫と⑭である。次いで④⑧および②、それから①③および⑦⑩、薄いものは⑤⑥⑪、そして⑬であろう。

縁の薄いものは、どうしても評が書きにくい。というよりは、濃いものについての意見を多く述べたいとも思う。

それでも、⑤を初めて読んだ時の印象は強烈であった。「蝶々」の歌詞の「菜の葉にとまれ」は、ニが省略できないことによって〝花〟ではなく「葉」になったという解釈は納得できる。これに対して「補記」にあるように「葉」でよいとする批判があった由であるが、「なのはにあいたら、桜にとまれ」に続いて「さくらの花の…」とあるところから見て、氏の言われるようにやはり本来的には〝菜の花にとまれ〟とあるべきところであると言えよう。

⑥は、それぞれの動詞がヲをとるかニをとるかの史的変遷を丁寧に押さえられていて、興味深い。ただ、私の興味はむしろ、⑥の中でも後の方にふれられるニとトとのことで、いわゆる副詞語尾としてのニとトとの関係はどうか、ニ・トを含むナ行とタ行との対立（連体の格助詞ナ・ノとツ、助動詞ヌとツ、など）は何であるか、という方が気になる。⑨⑫にあるように氏は朝山信弥氏「語尾に『に』を有する古代象徴辞の一問題」[注1]を熟知されているので、続けてニ・トに関する論を書いてほしいものだと思う。ニは、ガ・ヲと合わせとらえられると同時に、トと合わせとらえられて、両者の接点として位置づけられるのであろう。

⑪は、柳田国男を引いてタビ［旅］をタブ［賜］と関係づけられる。タブ［賜］とタマフ［給］との新古をどう見るのがよいか、今私には判断がつかない。

二

⑦⑩は、和名類聚抄（以下、和名抄）二十巻本の地名を主な資料とされる。巻末に「語詞索引」と別に「地名人名索引」を付されたのには、この⑦⑩のあることが大きい。佐佐木隆氏「『和名類聚抄』地名訓の促音・撥音表記」[注2]に対する批判を、工藤氏と私が同じ時にしたことが思い出されたりする（佐佐木氏が、その後和名抄の研究をやめられたのは、意外であり残念である）。[注3]

さて、⑦⑩それぞれにおもしろく、例えば⑦の第五節の「師」や「福」・「徳」が音で受容されることなどはその通りだと思われる。因みに、現在の二字の都道府県名で音訓混用の例は、徳島と福井・福岡・福島だけである。第七節は遠藤邦基氏「濁音減価意識*」[注4]（*印は副題を省略したことを示す。以下、同様）を批判し、一音節語の（語頭の）濁音化による減価があるとは言えないとされる。これに対する遠藤氏の反論は私信の紹介の形で「補記」に記されるが、紹介されるように一音節語でも長音化したものは濁音減価が可能であろう。ただそれとは別に、遠藤氏の濁音減価の例はザマ（天草本平家物語）以降の頃のものかと見られ、和名抄地名の例はそれらと間があき過ぎて不安である。その意味で、遠藤氏

の和名抄地名の例に疑問を抱かれた視線は正しいとも言える。

⑩のu∨oの「変容」などは、なるほどと思う。なお、橋本雅之氏「再び『安相』の訓について」[注5]が、⑩を援用して播磨国風土記の「安相」をアサゴではなくアサグと訓むとされている。

①②③は、萬葉集の訓詁との関わりで、いろいろな観点から新しい意見を述べられる。巻末には「萬葉集歌番号索引」も付されている。工藤氏の萬葉集などの訓詁についての見方は、思わぬところから思わぬ意見が出されて、見事なものである。このことは、後述する④も⑨⑫⑮もそうである。④の「補記」にある、土井忠生氏の「工藤君のは手品みたいなものだね」という講評はそうしたところを述べたものであろうか。

①に対しては、言いたいことが多くある。ただ、氏が本書をこの形にされた意図(それについては第四節に後述)からすると、それをそのまま書き連ねあげつらうことがよいとは思われないので、二点だけ記しておく。第一に、「いはゆる強活用」(6頁)・「弱活用」(7頁)とは、川端善明氏『活用の研究』II[注6]の「弱活用㈠」・「弱活用㈡」に当たるという注釈であり、第二に、被覆形―露出形とされる組合せなどに通常と異なるものがかなりあり、中にはそれなりの理由があると推測されるものもあるが、それらの説明は基本的に省かれていることに対する不満である。

②については、やや詳しく述べたい。祝詞の「伊賀志乃御世」の例の指摘は貴重である。イカシは両活用的である点に問題が残らないではないが、この例がないとシク活用形容詞語幹+ノ+名詞の例は中古に下ることになる。ク活用形容詞語幹の地名「高」「若」「辛」「安」「軽」の例の指摘も重要である。

オソハヤ「〈於曽波夜母〉」(萬三四九三・東歌)を名詞の例と見ないことは正しいと思われる。恐らくはオソモハヤモとあるべきところが音数律の関係でオソハヤモとなったものであろう。

第三・四節で、上に何も伴わない形容詞語幹+ニの例はないとされることは、「補記」に示されるように山口佳紀氏が支持されるが[注7]、これも正しいと思われ、私も既に利用させて貰っている。

このように②は重要な指摘が多くて、高く評価されてよいと思われる。ただ、それにも拘わらずモトナについての記述は遺憾ながら戴き難い。工藤氏は、「上代語概説」(『時代別国語大辞典上代編』)が「副詞的に、単独で――モトナ」と挙げるのを批判されるが、実はこれは誤植と見るべきもので、モトの右にも傍点を打つべきところであり、あるいは、形容詞モトナシを認めるかどうかに問題があるとするならば、ハヤの例を挙げるべきところであった。「上代語概説」のこの箇所の恐らくは基となっている橋本四郎氏「ク活用形容詞とシク活用形容詞」[注8]は、「もとなかかりて・はや帰りませ」とモトナに傍線を引かれている。逆に言うと、工藤氏は橋本四氏論文を見ずに②を書かれたということである。

③は、「カナシの語幹をカヌに求めることの妥当性」(59頁)や見ガ欲シ・在リガ欲シについての記述がおもしろい。

④⑧は、北原保雄氏㈠「形容詞のウ音便*」・㈡「形容詞『ヒキシ』攷*」・㈢「形容詞の語音構造」[注9]とともに、語幹末がイ列・エ列

のク活用形容詞（工藤氏はそれぞれ「イ列音形容詞」・「エ列音形容詞」と呼ばれる）について考察されるもので、北原氏(一)・(二)がイ列のもの、工藤氏④⑧がエ列のもの、北原氏(三)が両者などについて述べられる。

北原氏が「イ列音形容詞」がない、ないし、極めてありにくいとされるのに対して、④は語幹が一音節の「エ列音形容詞」がない、ないし、極めてありにくいと述べられていて、非常に興味深い。ただ、工藤氏は、エシをシク活用と見る方向から述べられるが、天智紀歌謡の二例はク活用であるので、エシをク活用と認めた上で、これは極めてありにくく通常はヨシが用いられるとする方がよいと思われる（実際、氏はそうしてもよいとされている）。吉野・吉野を「シク活用形容詞の語幹による構成」と見られることについては、ク活用ヨシ・エシの語幹が一音節であることに注意して、同様のナシ［無］もシク活用の語幹かと見える水無川・棚無小舟などの例があることと合わせ考え（現代語でサを挿入してヨサソウダ・ナサソウダと言うことも参照）、安定を求めて二音節化したものと見て、吉野・吉野などの例からヨシ・エシをシク活用と見ようとするのは避ける方がよいかと考えられる。

⑧は、「ケシ型を含むエ列音形容詞が、中世から近世にかけて衰滅する」ことについて述べられる。このことは、少し後に発表された北原氏(三)も同趣旨であるが、「衰滅」の時期を明らかにしようとされている点で、⑧の方がより詳しい。

極めてありにくかった「イ列音形容詞」は鎌倉以降少しずつ増え、逆に「エ列音形容詞」は「衰滅」するという、対照的な変遷をここに見ることができる。

三

⑨⑫⑮のうち、⑨⑫についての私の意見は既に詳述したので、ここに繰り返さない。(1)「縮重複・一部重複続考――合わせて工藤氏に対して述べる――」[注10]がそれであり、後にできるだけ手を加えないで『国語重複語の語構成論的研究』[注11]（以下、拙著と呼ぶ）第三篇第二章とした。(2)「重複と接尾*」[注12]にもふれたが、これが主ではない。私の側から経過を少し述べれば、⑫は私への批判であったので、私としては⑫およびその前稿たる⑨について詳細に反批判の意見を述べざるを得なかった。その際に、⑨を批判された竹田純太郎氏「『万葉集』について」[注13]についても述べた。ただ、⑫の批判の対象である(3)「一部重複と縮重複」[注14]を拙著第三篇第一章とする際に、これもできるだけ手を加えないように意図したが、用例の追加修正など若干の手を加える結果となった。これはやむをえぬこととして了解賜りたい。私の反批判について、工藤氏は、⑫の「補記」にあるように、⑭の末尾に少し述べられ（⑮の冒頭にもふれられ）、かつ、「国語学」197[注15]での拙著への書評に述べられる。その後者に対してなお言いたいことはある。またそのこととは別に、拙著への重要な指摘があったことに感謝している。いや、ここはそのようなことを述べる場ではなかった。

なお、⑫で「枝もとをゝに」の「或云」の「〈枝毛多和々〉」

(萬二三一五)を「多和く二」などの誤写とされるのは、恐らく正しいと思われ、既に従っている。[注16]

⑮は、ヌナトモモユラニのモを「誤入」とされる。その結論の正否は判断できないが、しっかりした一つの論である。ただ、モソロをモソ+ロととらえながら、モユラがモユ+ラととらえられる可能性を検討されないことのみが不審である。

最後に⑭についてであるが、私はこれに対する意見を(4)「ヤカ型語幹の構成」・(5)「カ・ク・グ」[注17]などに述べた。⑬にもふれられる遠藤充彦氏「『そびゆ』『そびやか』などに就いて」[注18]に基づくソヒヤグなどの清濁には納得できないと、(5)で述べた。また、ヤカ型語幹とラカ型語幹とは構成の異なることがあると考えられて、両者をまとめて「簡素に記述できる。」(274頁)という見方は正しくないと思っている。「歴史はなだらかに体系は簡素に記述することが望ましい」(282頁)という氏の基本はよく理解できるが、ここではやや無理があろう。それについては(4)で、両者の差違についてはその後も(6)「ラカ型語幹の構成」・(7)「ヤカ型語幹とラカ型語幹」[注19]などで述べたので、参照していただければ幸いである。

一方、⑭は、浦部重雄氏「『宇士多加礼許呂呂岐弖』考」[注20]を批判される点が有効であり、この点は神野志隆光・山口氏『古事記注解』2[注21]に受け継がれた。私は浦部氏論文を一旦信じただけに、工藤氏の視線の明るさに敬服する。[注22]

また、阪倉篤義氏が「クとグとが、同一の接尾語であって、後者はいはゆる連濁形であるのか、乃至は本来別の接尾語であるのかは、あきらかでない。」[注23]とされるのに対して、「やがて時代が下って、ク語尾がさけられる時期があったのではないか」と述べられ、しかも、その理由として副詞語尾ク・形容詞連用形〜クとの関係を挙げられるのにも、蒙をひらかれる思いであった。私の(8)「ク型動詞とグ型動詞」[注24]は、山口氏の〝濁音共存忌避の法則〟[注25]にも多くを負っているが、⑭の力も甚だ大きい。私は、濁音化の理由にク語法との関係を追加しただけである。また、⑮の「補記」にある(9)「〜キと〜ギ」[注26]も、基本はその延長である。

四

本書は、こだわりの書である。「藝」字を、多く「國」字を用いられ、「千九百六十九年十一月」(30頁)などと書かれる(「一九六九年」としながら「一一月」ではなく「十一月」とすることに違和感を持たない人は多いようであるが)。キーワードではなく「鍵言葉」(262頁)とされ、また、E-mailアドレスではなく「電子便宛先」(奥付)とされ、そこに「kudo」でも「kudoh」でも(無論「kudou」でも)なく「kudoo」と書かれる。私は、それらを見つけて、その一つ一つに感心している。

そして、最大のこだわりは本書の形である。「例言」に、まず「書名が示すように、本書は論文集であって、著書でない。よって初出の形の再現に努め、原論文の変更は次の諸点にとどめた。」として、変更点を挙げられる。そして、「稿末に『補記』を添え、各稿の初出の誌名・書名と掲載時期、執筆動機、後の経過、現在

の見解、前項までに含まれない微細な変更などを簡単に記した。」などと言われる。このような形にされたことについては、「あとがき」に「わたし自身の考えは、最近たまたま『國語學』第百八十六輯と『萬葉』百六十二号に書いた二編の書評で述べる機会があった。」と述べられていて、前者には「論文集ならば、発表当時の形で不都合はない。」「著書となると……論文は一度解体して再構成せねばなるまい。」などと、後者には「著書は著書らしく、論文集は論文集らしくありたい。論文集を著書と称すべきではない。」などとある。

工藤氏は本書を言わば徹底的に論文集とする道を選ばれたことになろう。しかし、「初出の形の再現に努め」られるために、「一昔以前に書いた文章の行儀の悪さは意外であった。」(あとがき)とか「ぶざまである。」(⑨の「補記」)とか自ら言われるものまでもが「初出の形」で「再現」される。これらはやはり書き改められる方がよかったのではないか。書き改めること自体は、決して「論文集を著書と称す」ることではないと思われる。私がこの評で述べた批判の多くは、いや、ほとんどは、書き改められていれば批判されるようなことではなかったであろう。換言すれば、私の批判はただ一つ、全てを「初出の形」で「再現」されたことに対して、ということになろうか。

あるいは、氏の主張に従うならば、徹底的に「補記」を詳しく書いてほしいということになろう。「現在の見解」などは、「簡単に」でなく、むしろ詳細に書かれるべきではなかったろうか。

なお、この評の標題に「工藤力男著」としたのは編集委員会ないし事務室からの指示に従ったまでで、氏の意を汲まない意ではない。奥付に「著者　工藤力男」とあるのも、氏の意には沿わないのであろうけれども、その程度のこととして了解されたい。[注27]

五

拙著の評者として工藤氏が選ばれ、そして、本書の評者として私が選ばれた。そうした関係から、私はお断りすることができなかった。編集委員会は、氏と私との間の批判と反批判などをよく知ってそうされたのであろうと推測される。しかしながら、氏と私とは批判と反批判の当事者であって、評者として適任ではないのではないかと思われる。私は、正直に言って書きにくかった。評者としてではなく、当事者としての意見がどうしても出てしまうからである。当事者の立場から書くことを望んだというのであれば、それは悪趣味ではないのかと思われさえする。氏も、恐らくはいろいろ苦労されたであろうと忖度される。にも拘わらず、氏が、そうした不満を洩らすこともなく、評者の立場から書かれたことに、改めて敬意を表するものである。それに反して、私は、このようなぼやきを書かずにはいられないでいる。今は、私が右に書いてきた批判に対して、読者がこうした事情を割り引いて読んでいただくことを願う他はない。

なお、この評の前に、乾善彦氏による書評がある。[注28]文字・表記の分野について詳しく、また、私とは見方の異なるところも多く

あっておもしろいので、合わせて参照願いたい。

本書は、多数の人に読まれるべきである。そこに、多くの新しい視点と手がかりとがあるからである。私にとっても改めていろいろと考えさせられるところ、大であった。本書が、成城大学文藝学部研究成果刊行補助金の交付により、廉価であることもありがたいことである。

注1 『朝山信弥国語学論集』[1992・5 和泉書院]、もと「国語・国文」10―2 [1940・2]

注2 「国語学」138 [1984・9]

注3 工藤氏「和名抄地名の有韻尾字訓注について」・蜂矢「和名類聚抄地名の促音・撥音表記――佐佐木氏の《短信》に対して――」(「国語学」139 [1984・12])

注4 「国語国文」46―4 [1977・4]、のち「濁音減価の派生意識」(『国語表現と音韻現象』[1989・7 新典社] 第一章)

注5 「風土記研究」6 [1998・8]

注6 [1979・2 大修館書店、1997・4 増補再版 清文堂出版] 第二部第一章第一・二節

注7 『古代日本語文法成立の研究』[1985・1 有精堂出版] 第三章第七節、もと「形容動詞の成立」(「国語と国文学」58―5 [1981・5])

注8 『橋本四郎論文集』国語学編 [1986・12 角川書店]、もと「女子大国文」5 [1957・3]

注9 (一)「国語国文」36―8 [1967・8]・(二)「同」37―5 [1968・5]・(三)『中田博士功績記念国語学論集』[1979・2 勉誠社]

注10 「萬葉」124 [1986・7]

注11 [1998・4 塙書房]

注12 『萬葉集研究』13 [1985・9 塙書房]、のち拙著第六篇に当たる。

注13 「仏教大学通信教育部論集」18 [1984・3]

注14 『論集日本文学・日本語』1上代 [1978・3 角川書店]

注15 [1999・6]

注16 萬葉集古義に同様の説が見えること、竹田氏論文が指摘される。

注17 (4)「ことばとことのは」8 [1991・12]・(5)『国語語彙史の研究』14 [1994・8 和泉書院]

注18 「立教大学日本文学」35 [1976・2]

注19 (6)『森重先生喜寿記念ことばとことのは』[1999・3 和泉書院]・(7)『国語論究』7中古語の研究 [1998・12 明治書院]

注20 「訓点語と訓点資料」76 [1987・2]

注21 [1993・6 笠間書院] 6黄泉国、もと「『古事記』注解の試み(六)*」(『論集上代文学』19 [1991・12 同])

注22 「カ・ク・ケシ」(「叙説」14 [1987・10]) 参照。

注23 『語構成の研究』[1966・5 角川書店] 第二篇第三章第四節

注24 「ことばとことのは」9 [1992・11]・10 [1993・12]

注25 「古代語の複合語に関する一考察*」(「日本語学」7―5 [1988・5]) 参照。

注26 「萬葉」150 [1994・5]

注27 なお、「萬葉」164 [1998・1] の浅見徹氏の「編輯後記」参照。

注28 「書評 工藤力男著『日本語史の諸相 工藤力男論考選』(「成城国文学」16 [2000・3])

(一九九九年八月発行 汲古書院刊 A5判 三〇九ページ+索引一二ページ 本体価格三五〇〇円)

――大阪大学大学院教授――

(二〇〇〇年一〇月一六日 受理)